

『中の根本の言葉を章とした知慧（根本中論）』

（第三章）

「視る」「聴く」「嗅ぐ」と、
「経験する」「触れる」「意」は
六根であり、それらの
享受対象は、視られる対象等である。 1

「視る」自らの我性とは、
それをまさしく視るのではない。
自らを視ないもの、
それが他を如何様に視ようか。 2

「視る」が良く成立させられる為に、
火の例をあげることはできない。
過ぎたと、過ぎていないと、歩むによって、
それには、「視る」と共に返答しよう。 3

僅かにも視ない時には、
「視るもの」ではない。
視るので、「視るもの」であるという、
それが如何様に正理となろうか。 4

「視る」は、「視る」そのものではなく、
「視る」でないものは、まさしく視ない。
「視る」そのものによって、視る者も、
解説されたと知りたまえ。 5

捨てていない視る者は有るのではなく、
「視る」を捨てたとしてもである。
視る者が無ければ、それら視られる対象と、
「視る」が何処にあろうか。 6

※斯くも、父や母に、
依拠して子は生まれるという
如く、眼と形色に依拠して、
識は起こると説かれた。

「視る」自らの我性は、
それはそれを、まさしく視るのではない。
自らを視ないもの、
それが他を如何様に視ようか。（仏）

※ツオンカパ著『正理の海』

「ここで、『斯くも、父や母達・・・』と、
挙げられた一偈の韻文は、インドの他の三註
釈論書には無く、この註釈においても、それ
について説明をなさない。観世音戒が『根
本中論』に四百四十九偈あると説かれたこと
とも合わないので、誤版より訳したと明らか
である。」

視られる対象と「視る」は無い故に、
識等の四支分は、
有るのではない。近取等が、
如何様であれば有るとなろうか。 7

「視る」によって、「聴く」と「嗅ぐ」と、
「経験する」と「触る」と「意」において、
聴く者と、聴かれる対象等を、
解説されたと知りたまえ。 8

「根を考察する」という第三章である。

(第四章)

物質の因に結ばれず、
物質を認識するとはならない。
物質というものに結ばれず、
物質の因も現れない。 1

物質の因に結ばれず、
物質であるならば、物質とは無因であるという
背理となる。如何なる意味であろうとも、
無因であるものは何処にも無い。 2

もし、物質に結ばれず、
物質の一つの因が有るならば、
果の無い因となるけれど、
果の無い因は無い。 3

物質が有るとしても、物質の
因も、まさしく合理にはならない。
物質が無くとも、物質の
因も、まさしく合理にはならない。 4

因の無い諸々の物質は、
理に適わない。まさしく適わないのである。
それ故に、物質についての分別は、
何も考察されるべきではない。 5

因の無い諸々の物質は、
理に適わない。まさしく適わないのである。
物質についての分別は
何も考察されるべきではない。(顕)

根本中論

因に似た果という
ものは合理ではなく、
因に似ていない果という
ものも合理ではない。 6

受と想と行と、
心と一切事物も、
様相は一切において、
まさしく色（物質）と、分析の次第は等しい。 7

空性を題にして論争した時、
誰かが返答し語るならば、
それによって、一切が返答されたのではない。
主張命題と等しくなる。 8

空性を題にして論争した時、
誰かが返答し語るならば、
その一切は返答されたのではない。
主張命題と等しくなる。(顕)

空性を題にして説いた時、
誰かが過失を捏造し語るならば、
それによって、一切は過失が付けられたのではない。
主張命題と等しくなる。 9

「蘊を考察する」という第四章である。

※ (仏) は、『根本中論』チョクロ訳（『ブッダパーリタ』に引用された旧訳）で、パツァブ訳（新訳）と異なる記述。

(顕) は、パツァブ訳（新訳）ではあるが、『根本中論』本論と記述が異なる『顕句論』で引用された偈を示す。

DECHEN 訳